

## < 解 説 >

地域こども教室の開設、体験活動の充実、防犯活動への取組など、今日の子どもの教育課題に対応した事業に指導者や協力者として参加する人が増えている。大部分は、子どものためになるものならと思って参加してみたが、「話を聞いてくれない」「できないとあきらめてしまう」「厳しく指導すると来なくなる」「学校だと喜んで参加してくれるのに地域では上手いかない」など思いがけない子どもの対応に戸惑い、子どもたちをどのように指導していたらいいのか、悩んでいる人が少なくないといわれる。

佐賀県がコーディネートした事例は、子どもの指導で苦労している活動支援者たちの「子どもの心を引き付ける指導技術を学びたい」という要望に応え、日ごろ悩んでいることを、「聞いて、見て、やって、考える」過程を通して、体験的に問題解決のヒントを得る、実践的な事業として行われたものである。一芸に秀でたプロの講師が、優れた技術とともに、説得力のある語り口で受講者を魅了する中で、受講者にとっては、実技を伴う体験のプロセスに、子どもの立場になって参加できた楽しい時間であったという。人は「聞いて忘れ、見て覚え、やって理解する。」という。この場合も受講者は、講師の手取り足取りの初歩からの指導で、子どもへの接し方、話し方、説明の仕方等の方法や技術などを学び、指導に自信を持つことができたと述べている。

「子どもの心を引き付ける指導技術」とは、単なるテクニックの習得にとどまらず、どうすれば子どもの活動意欲を引き出すことができるかということを含んだ考えである。言い換えると、子どもの興味、関心、意欲、態度をはぐくむ指導技術を身につけることが子どもの心を引き付けるということになる。例えば、事業の企画段階で、子どもの学習ニーズを受け入れた計画であったかどうか、活動内容に子どもたちの意志や意見が反映される場面があるかどうかは、子どもの活動意欲を促す重要な観点である。以下は、子ども指導教室などで指摘された子どもの意欲に関連した事例である。

### <子どものやる気を損ねた事例>

子どもの行動をいつも観察（監視）していた。子どもの態度を一定の「先入観、教育観、子育て観」で評価していた。子どもが主人公であるということを忘れお客様にしていた。子どもの出番をつくることができなかった。指導しなければならないという気持ちだけが先行し空回りしていた。子どもの行動が待てなくて自分でやってしまった。はじめのない子どもに基本的な生活習慣を身に付けさせようと思った。

### <子どもがやる気になった事例>

やってみたかった・知っていたことが体験できた。型苦しいと思っていた教室で自分のやり方（発想法、創意工夫）を認めてくれた。憧れていた先輩や友達と一緒に遊び勉強することができた。お年寄りから昔話を聞きながらものづくりをした。知っていることを友だちと教えあった。親子共同作業で家族の絆を感じた。悩み事等の相談を真剣に受け止めてくれる大人、先輩、友達がいた。一言の励ましの言葉。自分がしたいと思っていた目標がかなえられた（読書、ボランティア）。自分のしたことが人のためになったことを知った。

事例からも伺えるように、地域で「教える」ということは、子どもへの働きかけを通して、子どもの意欲や共感を引き出していくことを意味している。一方、教えるを受ける子どもは、出会った指導者の資質（使命感や責任感、子どもの成長・発達についての深い理解、教育的

な愛情、確かな指導、教養に基づく豊かな人間性など)に共感し、あるいは影響を受け、さらに活動意欲を高めていくことになる。今後、子どもの指導に当たっては、子どもとの良好な人間関係づくりとともに、一人一人の子どもの特性を理解し、考えさせる・表現させる等の子どもの欠損体験を補い、活動意欲を刺激する実践的な指導方法・指導技術の研修機会の充実が重要になる。この意味でも、佐賀県の実践事例は参考になると思われる。

(坂東 侑司)